

巻頭の言葉

畦に座って

顧問 井本伸廣

京都市内から、亀岡東部の、水田を宅地に造成した団地に移住して 30 年が過ぎた。水田は次々に宅地に姿をかえ、数年前には、20 階の高層マンションさえ建てられた。かつての篠（しの）大根の産地は、いまでは換金性のよい千枚漬用の聖護院かぶらと白菜畑に姿をかえた。4 月末ともなると、近くの里山で採れた背負いきれないほどのわらびが集荷場に運ばれていたが、20 年ほど前からは姿を消した。それでも、5 月ともなると苗代が準備され、米づくりが始まる。4 年前から休耕田の一部を借りている我が家の菜園でも、夏野菜の植え付けを始める時期は近い。

ささやかでも農作業を続けていると、畦で一服しながらいろいろと考えることがある。播種の計画、土のよしあし、連作障害、施肥の時期と量、生ゴミの堆肥化、草取りなど、直接、「農」にかかわることにはじまり、ミミズや土壌微生物のこと、昆虫や鳥、モグラ、川向いの畠に下りてくる猿、猪、鹿、外来のアライグマやヌートリア、霜や長雨、旱（ひでり）、台風の心配などなど。基盤地質と土壌とのかかわりも念頭にのぼる。

「字統」をひも解き、「農」字は、甲骨文では「林」と二枚貝製の農具を表す「辰」の象形文字の組み合わせ、金文では「田」と「辰」の 2 文字に由来することを知って納得してみたり、「土」は土をまるめた地主神の形を表わすなど、あらためて漢字世界の「奥深さに思いを馳せることも農の功德であろう。そしてなによりも、農の営みをとおして、生命の不思議さとそれを支える自然の微妙なバランスに気付かされ、収穫の喜びと共に、自分も「生かされてある」という感謝の気持ちが自ずとわき、優しい気分を満たされることが嬉しい。

しかし、日本の農業は、そんな悠長なことを言っておられる状況にはない。農業従事者のピークが 2000 年には、70～74 歳と高齢化しており、また 1961 年には 608 万 6000 ヘクタールあった農地が 2001 年には 479 万 4000 ヘクタールにまで減少してしまい、その要因として 1990 年代半ばからは、工場や宅地への転換よりも耕作放棄による割合が上回ってきているとのこと。まさに農民の高齢化と軌を一にしているといえよう。さらにカロリーベースでみた食料自給率は 40%と主要先進国のなかで最低の水準にあり、新鮮さが命の野菜でさえ、2000 年には、82%に下がってしまっている。小麦 11%、大豆 5%、飼料として欠かせないトウモロコシの 0%に至っては、鶏卵 96%、肉類 53%の自給率を保っているとはいえ

実質的には完全に輸入に依存していることになる。主食米は自給率 100%であるが、いっぼうで休耕田を生み出し、耕作放棄につながっている。農薬による土壌汚染も進行しており、BSE や鳥インフルエンザ、遺伝子組換え食品など、食の安全も危うい。いったい誰が日本の農業を瀕死にまで追いやったのか、怒りがふつふつと沸いてくる。田畑から子どもの姿が消えていったことと、子どもたちの安心や安全が脅かされる事態が多発していることとはけっして無縁ではあるまい、などと「ごまめの歯ぎしり」が続いている。

折りしも 3 月中旬のこと、亀岡市別院中学校の卒業式に参加する機会を得た。この学校は、市の南西部、大阪府に接した山間に位置する小規模校で、卒業生は 2 クラス 44 人、一人ひとり校長先生から卒業証書を受け取る顔は実に清々しかった。来賓も、自治会長、消防団長、駐在さん、採石場の経営者など地元の人士が中心。卒業生代表の答辞には、農作業体験や山菜採りなどでお世話になった地元の皆さんへの感謝の言葉が含まれていた。全員で斉唱した「ふるさと」の歌詞は、この学校のために作詞されたもののように感じられた。巣立っていった子どもたちの思い出には、自然に寄り添った人々の暮らしのあれこれが、ギッシリと詰まっていることであろう。米や野菜、鶏や卵など生きていくために欠かせない食材の多くを自ら育て収穫し、ときにはきのこや川魚などを採取し、食するといった生活を体験してきた子どもたちには、自然への感謝の念や互いを尊重し、人とひととのつながりを大事に思う気持ちは育っても、いじめや引きこもりなど疎外の行為は無縁であったろう。聞けば、不登校事例などはもちろん皆無とのこと。里山や「農」が人づくりに果たす意義について、あらためて考える契機となった。そこには「癒し」といったお座なりの言葉では表せない、もっと深い関わりがあるに違いない。そんな思いを強く抱いた卒業式であった。

参考：大野和興、2004、日本の農業を考える 岩波ジュニア新書

白川 静、1994、 字統 平凡社

(元京都教育大学長)

目 次

講演会報告

第9回自然と環境講演会

講演：山城の自然・・・・・・・・・・	浄瑠璃寺住職	佐伯 快勝	7
発表：私のふるさとの農業・・	ふれあいの駅助役	中西 稔	17
発表：昔の寺田村・・・・・・・・	本会理事長	山本 雅晃	22

調査・研究報告

日本の植生相と植生帯・・・・・・・・	顧問	村田 源	29
田辺高原尾根筋ハイキングコースの地質・・・・・・・・	天白 俊馬	37	
南山城の風景・・・・・・・・	本庄 豊	46	

協働活動報告

国土交通省近畿地方整備局淀川河川事務所受託事業・・・・・・・・	57
京都府山城広域振興局受託事業・・・・・・・・	60
セブン・イレブンみどりの基金 環境市民ボランティア活動助成事業・・・・・・・・	77

事業報告

第2回つる籠づくり教室・・・・・・・・	85
京田辺市文化祭・・・・・・・・	86
柿山に親しむ会・・・・・・・・	89
里山ふれあいハイク・・・・・・・・	90
みかん収穫ボランティア・・・・・・・・	92
里山料理教室・・・・・・・・	93
冬の昆虫観察・・・・・・・・	94
春の七草摘み・・・・・・・・	95
丹波黒豆味噌づくり・・・・・・・・	96
炭焼き体験学習・・・・・・・・	97
京都木津川マラソンボランティア・・・・・・・・	98
第9回自然と環境講演会・・・・・・・・	99

会員のひろば

俳句・・・・・・・・	城陽市	岡野 俊治	102
会誌『里山の自然』を読んで・・・・・・・・	京田辺市	矢放 加奈子	103
くいしんぼうの弟もつれてこよう・・・・・・・・	枚方市	中岡 はるか	104

